

《読み》のたちあがる場をめざして

——清水義範『トンネル』の授業——

白瀬浩司

(初出誌 Ⅱ 『教育』 第46卷第10号、国土社、一九九六年十月)

《読み》のたちあがる場をめざして

——清水義範『トンネル』の授業——

白瀬浩司

一

これまで何度か引用したことがあるが、次に引くのは、かつて高一の生徒（普通科・一九九二年度）が提出してくれた感想文の一部分である。

ぼくはこのような国語の授業がはじめてです。こんな楽しい小説が授業に出てくるとは思いませんでした。

国語といえはどこか勉強というふんいきのある文章を読んでいって、それがテストに出るといふパターンなのでぼくは嫌いでした。でもぼくはこの作品に興味があったので熱中して読むことができました。

いつしか所謂「国語嫌い」になってしまった生徒たちにとって、「国語の授業」とは「楽しい小説」と出会う時間などでは毛頭なく、「どこか勉強というふんいきのある文章」を読まされて「それがテストに出るといふパターン」の繰り返し、いわば、ある種の苦行めいたものなのだろうか。長い学校生活の中で彼らがそのように馴らされ

てきているのだとすれば、そして「国語の授業」が生徒たちを「国語嫌い」にさせ、のみならず、読むことや書くことから彼らを遠ざけることの一翼を担ってしまったているのだとすれば、私たちの日々の営みはいったい何なのだろうか。

生徒たちに読むことや書くことの楽しさを知ってもらうこと、あるいは心揺さぶる作品との衝撃的な出会いを演出すること——シンプルだが、それが私たちの原点であり、責務でもあるはずだ。いまさら言うまでもなく、読むことや書くことの喜びは、自己発見や自己表現の喜びであり、それは他者へ向けて自己を開いていくことにもつながるものとしてある。次に引く高二の生徒（普通科・一九九五年度）の感想文には、その喜びが素朴な言葉で語られている。

僕は、この作品を読んで、いつもと違う感じがしました。それは、まず、おもしろいと思ったことだ。今までの国語の中でこのようなものは、読んだことがなかったからだ。（中略）でもやっぱり、この作品を読んで、一番に言いたいことは、この感想文の題名に書いたとおり、「もう一つの国語」だという気がした。なぜなら、自分をやる気にしたからです。やる気というのは、人間にとって、重要なことだと思う。もしやる気がなかったら、ただボートとしているだけだろう。そして、全然おもしろくないのだ。それが過去の僕の国語に対する姿なのです。逆に言えば、やる気を起こしたら、わくわくしたりして、楽しいのだと思う。だから、この作品は、とても好きだと言える。ほとんどが自分の心の中を語っただけになってしまったけど、僕も前にも言ったように、少しですけど、意見が言えたのでうれしかったです。

時代状況の変化に伴って、教室で向き合う生徒たちの読書体験や語彙の質もまた確かに変わってきていることを、私たちは否応なく実感させられている。そして、ふと目にした書物のタイトル——『ことばを失った若者たち』（講談社、一九八五年）、『心が壊れる子どもたち』（講談社、一九八七年）、『滅びゆく思考力』（大修館書店、一九

九二年）等々——に、何とも言えぬ暗澹たる思いを掻き立てられてしまうのは、おそらく私だけではあるまい。しかしながら、生徒たちの中には読むことや書く（表現する）ことへの欲求が確かに存在する。

そんな彼らの欲求を国語教室に誘い出すための《仕掛け》、あるいは《起爆剤》として、私は現代作家の小説を自主教材として国語教室に投げ込むことがある^①。自主教材には、頼りになる所謂「指導書」はない。それは生徒たちにとっても同様であり、いわば、お互いが《徒手空拳》で作品に向き合わねばならないわけである。ただし、このことを「生徒たちの位置に下りていく作業」などといった言葉で形容してほしくない。私たちは、生徒たちより年齢的に上ではあっても、決して出来上がった存在ではないと思うからだ。もちろん、自主教材を用いる場合でも、それを年間授業テーマや授業計画の一連の流れの中に位置づけることを忘れてはならないが、ともあれ、それらはいつもの所与の役割を十分に果たしてくれた。実際のところ、前掲の感想文は、いずれも現代作家の小説を用いた授業の後に提出されたものであった。

生徒たちの感想文や作文は、授業時に配布する資料プリントや教科通信の記事として、あるいは、時に講堂礼拝の講話（わが校では学年ごとに毎週一回礼拝があり、その折に教員が持ち回りで当該学年生徒全員の前で話をする）として、機会を得ては彼らに還元されていく。いずれの場合でも、文の巧拙よりもまず、彼らの文章の面白いと思える点についてコメントすることを私は心がける。こうした作業を続けていくと、やがて志賀直哉『城の崎にて』であれ、中島敦『山月記』であれ、彼らの《爆発》はとめどなく続くことになる。

《読み》のたちあがる場——そんな国語教室を私たちはめざしたいものだ。ここでいう《読み》とは、生徒たちが作品を読み、自身の読みを表明（表現）する過程、さらには生徒同士の読みや教師のそれとがせめぎ合いつつ作品の主題を紡ぎ出していく過程をも含めた意味で用いている。

本稿では、一九九五年度の二学期後半に、高二普通科の生徒たちと取り組んだ『トンネル』の授業（全七時限）についてまとめておくことにしたい。

なお、この時の生徒たちは、高一から高二へと持ち上がった学年である^②。前年度に引き続き、この年度も『他者との関係性』と「個体（生命）の尊厳」の発見^③ということを年間授業テーマに据えている。

清水義範の短篇小説である『トンネル』は、『野性時代』一九九四年二月号（角川書店）に発表され、後に角川ホラー文庫『見知らぬ私』（一九九四年七月）に収載された。文庫に付された著者紹介は、次のようになってい

清水義範（しみず よしのり） 一九四七年生まれ。八八年『国語入試問題必勝法』で吉川英治文学新人賞受賞。著書『江勢物語』『アキレスと亀』『ニッポン見聞録』『ジャンケン入門』他。

『トンネル』が先の年間授業テーマに響き合う作品であることは言うまでもない。大学時代に直面した兄の死、さらには大学卒業後の就職、妻との結婚、子供たちの誕生と成長、会社での昇進やマイホームの購入など、他者との関係性の組み替えを迫られる様々な局面の中で主人公が見出した自身の位置（居場所）について、生徒たちはどのような読みを呈示してくれるであろうか。

また、これまで彼らと取り組んできた自主教材では、彼らの過去（小学生）・現在（高校生）・未来（三十歳代）とそれぞれ重なり合う時間を生きる人物が主人公に配されていた。今回は四十歳代後半の主人公が登場する。したがって、十代前半・十代後半・三十代前半という作品世界の時間をくぐり抜けてきた生徒たちは、いわば次なる未来に立ち会うことになる。

導入の段階では、トンネルが《A地点とB地点とをつなぐ空間である》ということを確認した。また、全篇を読了したところで、

《清水義範『トンネル』を読み終えて、作者が何を言いたかったかではなく、きみ自身がどのような主題を読み取ったか、あるいは自分が連想したり思い出したことなどを、何でも自由に書きなさい。》

という論題で感想文を課している。今回の授業展開は、担当各クラスとも、おおよそ次の通りであった。

第一時限Ⅱ導入、プリント(1)・(2)の読解。

第二時限Ⅱプリント(3)の読解。

第三時限Ⅱプリント(4)の読解。

第四時限Ⅱプリント(5)の読解。

第五時限Ⅱプリント(6)・(7)の読解。

第六時限Ⅱプリント(8)の読解。

第七時限Ⅱプリント(9)の読解、感想文。

授業のテキストには、文庫収載本文を私がワープロで打ち出したプリント九枚（B4用紙縦・40字×30行×上下2段組）を用いた。ただし、授業では、プリント化した本文を最初にすべて配布して全文を通読する作業はおこなわず、一枚ずつ配布して一時限につき一〜二枚の割で読解に取り組みという形態をとった。したがって、生徒たちは、最後のプリント（九枚目）を手にした時はじめて『トンネル』という作品の全貌を知りうるのであり、配布されるプリント一枚ごとに、主人公と共に作品世界の次なる現実に立ち会っていくことになるわけである。^④

この授業形態に対する生徒たちの反応は、例えば、「現代文の授業で『トンネル』を読んで、ぼくは久しぶりにおもしろそうなものだと思った。思った通り、少し読んでみると、次々と先が気になり、どんどん読みたくなって

いった。」(政史・O)、「この話を読み終わってズバリおもしろかった。今まで習ったいろいろな話の中で、早く次のプリントが見たい、読みたいと思ったのはこの作品だけだった。」(晃宏・I)、「やっぱり今度の作品『トンネル』も面白かった。最初の方は寝ていて読んでなかった。でも三枚目ぐらいからは、すすんで読んでしまった。」(隼人・U)といった感想からも窺^{うかが}うことができると思う。

教科書で関心を惹かれるような作品に出会った時、生徒たちが自分で結末まで読み通してしまうというのはよくあることだ。そして、おそらく結末を知った時点で、彼らの多くは作品(あるいは授業)に対する関心を半減させていくことになるのだろう。そんな性急さの一方で、彼らは漫画週刊誌や連続TVドラマ等によつて、関心を次回に持ち越すことに馴らされてもいる。この授業形態は、生徒たちの後者の感覚に迎合しているように見えるかも知れない。しかしながら、作品との出会いの姿としては、きわめて素朴で本質的なものに近いのではないかと私は考えている。

二二

『トンネル』の主人公は、岸和田啓二という四十八歳のサラリーマンである。会社では二年前に次長になったが、その上の部長には定年まで勤めてもなれるかどうかわからない。「仕事に疲れ、通勤に疲れ、疲れに気づくこともなくただ日を重ねていくのだ。」(第一章)、「彼は疲れていた。四十八歳までしゃにむに働いてきた疲れが、体内に膿のようにたまっていた。」(第三章)というのが、彼の常態として描かれている。

この秋(三か月前)、彼がようやく手に入れたマイホームは、通勤時間三時間という都心から程遠い場所にあった。いきおい彼は、深夜に帰宅して早朝には出勤という生活の繰り返しを強いられることになる。妻は新しいマイ

ホームをピカピカに磨き上げるのに夢中で、大学生である上の息子は既にアパート暮らし、下の娘も来春には短大の寮に入ることになりそうだ。家は購入したものの、啓二の生活には何か欠けていた。

帰路の電車の中で、ふと彼の目に映った夜の光景は、彼のマイホームのたたずまい——「やけに寂しい田舎に、ぼつんと一軒新しい家」——とは対照的な相貌を呈している。

窓の外の景色に面白いものはない。しばらくの間、よくまあこんなに、という気がするほど家が建ち並び、ビルがひしめき、明りのともった窓のひとつひとつに、人の気配があるだけのことだ。窓ごとに家庭の団欒、と思えばあたたかい情景のようだが、そんなほのぼのとした思案が追いつかないほどに、窓が重なり、続きすぎている。こんなにも多くの人の生活をとめてすべて想像することはできない、と思うと、ふと孤独感に押しつぶされそうになる。こんなにも多くの人間が、私とは無縁にひしめきあつて生きていて、声がかこえてこないのだ。私はその隙間を、ただ通過するだけで、永久に景色の実体と触れあうことはない。（第一章）

しかし、その光景に対して抱いた彼の感慨や「孤独感」は、おそらくマイホームに対しても同様のものではなかったに違いない。結局のところ、彼の家族もまた「無縁にひしめきあつて生きていて、声がかこえてこない」状況にあり、彼はマイホームという「景色」を「ただ通過するだけ」で、その「実体と触れあうことはない」日々を送っていた。

そんなある日、彼はトンネルの中に四角い小さな窪みくぼみがあり、そこで生活している二十五歳ぐらいの男と小学校三年生ぐらいの女の子の姿を目撃する。奇異に感じつつも疲れのせいと自身に言い聞かせ、そのまま忘れ去っていた啓二であったが、二週間後に再びその姿を目撃し、やがてそれが山で遭難死した兄（隆一）と九歳で病死した姉（阿子）であることに気づく。その時の、

なんとという満ち足りた生活だろう。／トンネルの闇の中に愛に包まれた永遠の世界があるのだ。トンネルの

中とは、なんてうまいところに目をつけたものだ。そんなところに部屋があつて、静かな生活があるなんて、誰も想像しやしないぞ。／あたたかい暮しだ。／この上なく幸せな、欠けるもののない生活があそこにある。

(第四章)

という感慨からも、彼が求めていたもの（あるいは、彼の日常に欠けていたもの）を窺い知ることはできよう。

生前の兄は、啓二が「反抗しても、あえて別の道を進もうとしても、誘いを断つても」、笑いながら「お前らしくていい」と認めてくれる存在であつた。彼にとって兄は目標であり、死後もなお心の支えであり続けた。就職の時も、結婚の時も、子供の誕生の時も、彼は心の中に住む二十五歳の姿のままの兄に呼びかけるのを常としていた。「会いに行くのが当然だ」という思いに駆られ、次の駅で終電を降りた彼はトンネルへと向かつた。トンネルの中で回送電車をやり過ぎ、さらにレールの下に流れる地下水の大河を渡り、やがて例の窪みに辿り着く。

「兄貴……」／「鞆なんか提げてきて、おかしな奴だな」／と、隆一は言った。昔のままの、すべてを許すような口調だつた。／「あきれるほどつかつな奴だよ。でもまあ、お前らしくていいが」／「うかつ、つてのは……」／彼は二人の直前まで進み出て、そう言った。／隆一は笑い、小学生の姉を見てからもう一度顔を上げた。そして、この上なくなつかしい声で言った。／「自分が死んだことに気がついてないんだからあきれるよ」／岸和田啓二はその言葉の意味がのみ込めるまで五秒ほど立ちつくしたままだつた。／それから、ようやく表情をゆるめ、ほっとしたように笑つた。

(第五章)

小説は、こんなラスト・シーンで幕を閉じる。あまりにも唐突な結末ではある。そのせいもあつてか、生徒たちの間で《主人公は、いつ死んだのか》ということが争点の一つとなつた。結局のところ、確証がないために諸説乱立したまま決着はついていない。ただ、そのことで却つて、彼らは《読み》の横並び状態を楽しんでいるようにも見える。

(1) 「推理・岸和田啓二の死」(直人・A)

まず思ったことは、「またユウレイ物か。Sラセはユウレイ物が好きやな」ということだ。一年の時やったユウレイ物『会いたい』と同じく、この『トンネル』も、読み終えた後、僕を非常に不愉快にさせてくれた作品となった。／いつたい岸和田啓二は、どこで、どんなふうに死んだというのだ。そこがはっきりしなかった。それが僕を不愉快にさせた最大の理由だ。／岸和田啓二の死について、考えてみる。怪しいのは、やはりあのトンネルだろう。「木霊台トンネル」という怪しい名からして、霊界の入口という気がしなくてもない。そして途中にあつた地下の川は、やはり三途の川なのだろう。／たぶん、岸和田啓二は、トンネルの手前で臨死体験をしたのだろう。そして、三途の川を渡ったので、本当に死んでしまったに違いない。／岸和田啓二は、最初自分が死んだことに気づいていなかった。そのことがわかった時、「ほっとしたように笑った。」とあるから、疲れに疲れた生活から、解放されて安堵感にひたっていたのだろう。／普通の人ならこの終わり方で納得するかもしれないが、僕はそうはいかない。「ヤイ、岸和田啓二、てめえ、奥さんはどうする気だ。」／奥さんの行く末が気になる今日このごろである。

(2) 「岸和田啓二は死んでいた」(泰蔵・W)

最後まで読んで、岸和田啓二が死んでいたという展開には驚いた。なぜなら、いつ死んだかということはこの話にはいつさい書かれていないからだ。いま考えると、プリント一枚目の「疲れに気づくこともなくただ日を重ねていく」という表現から、物語が始まった時から既に死んでいたと思う。だけど、そう考えると疑問がいろいろ出てくる。岸和田啓二は死んでいるのに、通勤時間三時間かけて会社へ行って、残業したりできるわけがない。当然そこで会社の人と接触するわけで、そういう時はどうなっていたのか。岸和田啓二は自分が死んだことに気づかないくらいだから、会社の人と普通に接したことになる。会社の人には、彼の異変に何も気

づかなかったのか。そういうことを考えるときりがない。しかし、またこの話の中では人と接触した場面もいっさい載っておらず、疑問は深まるばかりだ。／もう一つ、岸和田啓二の死を読みとれる部分がある。それは、トンネルの中で壁の窪んだ小部屋の中に人を見た時である。死んだ兄が見えるということは、岸和田啓二も死んでいるから見えたのだと予想できる。よって、物語の途中が始まる前かに岸和田啓二は少なくとも死んでいなければならないことを断定できる。物語の主人公が死んでいたという話は初めてなので、最後の意外な結末はとてもおもしろかった。

「このほか、「岸和田啓二は、いつのまにか死んでいた。いったいどこで死んでしまったのだろうか。みんなは、いろいろ言っていた。僕もいろいろ考えた。そして、啓二が死んだのは、トンネルの中で首筋に冷たい水が一滴しったり落ちてきた場面で、心臓マヒをおこしたのだと思う。だから、その直後に無性に楽しくなったと書いているのだと思う。」(正平・T)、「彼の兄と姉が昔のままだったことから、トンネルの中は彼にとっての天国だったのだろう。ということとは、岸和田啓二は電車から降りて見に行こうとした瞬間、過労死していたのではないかと僕は思った。」(良啓・M)、「岸和田啓二は、ずっと前(家を建てた前後くらい)に死んでいたのではないだろうか。しかし、彼はその事に気付かずに生活していた。その時、兄達が彼に死を気付かせるために出てきたのではないか。そう思う方が自然である。」(亨・Y)、「たぶん、この話の最初から最後までは岸和田啓二が死んだ瞬間なのだと思う。彼は死んだ瞬間、これだけのことを思った後、違う世界に行つて兄や姉に会つたのだと思う。啓二が死ぬ瞬間、走馬燈のように見たいろいろなものは、暗いものばかりだった気がする。」(宏樹・H)、「岸和田啓二は、実は事故か働き過ぎで寝たきりになってしまつて、夢を見ていた。トンネルの中でこたつにあたつている兄たちを見ても、夢の中なので他の人に騒がたてられたり、噂が広がるということがなかったわけである。」(貴行・K)といった具合である。

四

ここで、生徒たちが自分なりに読み取った主題について論じているものを掲出しておこう。

(3) 「彼の失った物と必要だった物」(肇・I)

岸和田啓二は日々の仕事に疲れ、通勤に疲れていた。そんな彼が通勤電車の通過するトンネルの中で不思議なスペースを発見する。そこには彼の死んだ兄と死んだ姉がいた。／これは彼が日々の生活に追われ、見失った物の幻影が見えたのではないだろうか。／彼は次長になりマイホームを建て、子供を大きくし、そして何かを失った。／彼が失った物、それは何だったのだろうか。それは兄であり姉であり自分自身、そして暖かい家庭の団欒だったんじゃないだろうか。／彼はこれまで色々な物を失い、また捨てながら生きてきて、とうとう自分まで失ってしまったんじゃないか。／人間は自分を認めてくれる人、必要としてくれる人がいるから生きていけるのではないか。そんな物を無くした彼は、自分を認めてくれる人、分かってくれる人をトンネルの中に見出し、自分もその中に入っていったのだと思う。／彼に必要だったのは、マイホームではなく次長の席でもなく、彼自身を認め、必要とし、暖かく接してくれる人達だったのでないだろうか。

(4) 「岸和田啓二の疲れ」(延亮・I)

岸和田啓二は確かに死んでいた。過去の兄の幻影を追い始めたときから。彼の何十年もたまった疲れがトンネル内で、彼にしか見えない兄と姉の幻を見せていたのだと思う。周りの人もみな彼には無関心な社会、彼が死のうと生きようとただ日は流れてゆく。／彼のあまりにも異常な兄への執着心、それは同じことが繰り返されるだけの平凡な社会からの逃避ではなかっただろうか。その逃避こそ彼の精神的な死だったのでないだろ

うか。彼をあげましてくる人、話を聞いてくれる人、そんな人は誰もいない。追いつめられた中年男の心のよりどころのなさが、一つの人格を壊してしまったのだろう。頼るところは兄しかなかった。その兄はもはや死んでしまっている。そのジレンマがいるはずのない場所、生きてはいない人の幻を生み出したのだと思う。／とうの昔に死んだ人の思い出など捨てて、今、生きることに集中すればトンネルの中の兄と姉を見ることはなかっただろう。けれど、昔の夢を見続けるのも、そんなに悪いことでもないらしい。

感想(3)・(4)には、他者との関係性の中で自身の位置取りをなし得ずにいる主人公の「孤独感」、あるいは、他者との関係性の喪失が自己の喪失へとつながるといことが見事に剔抉てつげつされている。ついでながら、感想(2)「この話の中では人と接触した場面もいっさい載っておらず」や、「プリントには一度も啓二の自然な話し方は載っていないが、最後には兄と自然に話していたのです。」(孝治・K)といった指摘も、主人公の他者との関係性の稀薄さを傍証する。

(5) 「吾、いざ死に向かわん」(貴志・K)

トンネルの中に人がいたら、自分も啓二と同じく錯覚だと思っだろう。でも、今の世の中、朝から夕方まで「眠い」を連発しているSラセ先生を筆頭に、疲れている人が多い。啓二もこの点で現代っ子だったのだ。疲れが日常化している時代の中で、疲れのない場所に知らず知らずのうちに憧れてしまうのだろう。下手をすれば、「この世に生きている限り、疲れはおそらくとれないだろうから、いつそ死んで休息の場所を求めよう。」という考え方にたどり着くかもしれない。そんな考え方が広まっていけば、自殺志願者が増殖する非常事態になっっていくだろう。現に啓二は死んでしまった。しかも、それによって本当の休息の場所を見つけたという雰囲気を、この作品はにおわせている。／啓二は心の片隅には死を予感していたのではないだろうか。仮に兄と姉がトンネル内で仲良く暮らしていたとしても、僕だったら入っていかないと思う。そこに後先かまわず入っ

ていったのだから、兄と姉に会えるなら死んでもいい覚悟だったことだけは確かである。

多忙を極める現代社会において、ストレスや疲労の恒常化は岸和田啓二ばかりの現実ではない。それゆえに、「これを読んで一番思ったことは、将来の自分と変わらないだろうということだ。」(大五・K)、「僕が見た岸和田啓二は、今よくいるサラリーマンだと思う。出世やマイホームのためだけに働いていたが、そのマイホームはただ寝に帰るだけのものではない。高一の頃の僕もクラブでこういう生活をしていた。」(正平・T)といった主人公の日常に対する共感の表明も決して少なくはなかった。

五

既に導入の段階で、トンネルという空間の担う役割に関する「もし、このような霊界と人間界を結んでしまうようなトンネルがあったとすれば見てみたいし、いろんな人に会いに行きたい。」(清仁・N)といった把握の登場することを、私はひそかに期待していた。のみならず、この作品の《読み》を、ある種パターン化された死の捉え方に即しつつ、《現実》に疲れ果てて安らぎを求め続けた主人公が、やがて死によつて自身をさいなむ孤独感から解放されていく過程》というかたちに収束させることを企図してもいた。

そのための方向づけを読解の過程でおこなってはきたが、前掲の感想文をみると、《読み》をそこへ収束するすわりの悪さを、何となく生徒たちが感じていることがわかるだろう。そして、そのすわりの悪さの感覚が、単に彼らの若さに由来する死への拒否反応といったレベルのものでないことを、次に掲出する二つの感想文は示唆している。

(6) 「岸和田啓二の真実」(理裕・M)

この話を読んで僕が思ったことは、たぶんこの岸和田啓二という人は生きていくけど死んでいるんだと思う。どういうことかというのと、この人物は生きてはいるが死んだも同然の人生だということだ。だから、最後兄の隆一と姉の阿子がそんな死んだも同然の暮らしをしているのなら本当に死んでここに来た方が楽しいということとで迎えに来たんだと思う。／岸和田啓二という人間はこの話を読んでいると本当に平々凡々な生活をしているなと思った。考えようによってはそれ以下にもなると思う。僕は絶対にこんな人間にはなりたくないと思っただ。でも、彼をこんな人間にってしまったのは兄の隆一だと僕は思った。なぜかというのと、岸和田啓二はずっと大きすぎる存在の兄を目標みたいなものにして乗り越えようとしていたと思う。だけど、兄の隆一は死んでしまい、啓二は目標であり、これからの人生の支えでもある兄を失ってしまったので、よりよく生きようとする意欲がなくなってしまったんだと僕は思った。／最後に、岸和田啓二が入っていったトンネルは死の世界との境界線だと僕は思う。だから岸和田啓二はそん中で行くか戻るかを選択しなければならぬだろうと思う。だから、兄の隆一と姉の阿子はさつきは迎えに来たと書いたけど、実は生きるための意欲を与えに来たのかもしれない。

(7) 「生きる意味」(閑雄・H)

おい、岸和田啓二、お前はいつ死んだんだ。そして死因は何なんだ、と思うのは僕だけじゃないはずだ。少なくともクラスの半分ぐらいの人は、その事を題材にしただろう。そしてまた僕も僕なりにそれを追求していきたいと思う。／まずこの話に出てくる時間は「その日」、「次の日」、「約二週間後」、「その翌日」、「その夜」の約十七日間である。これをきっちり十七日間として考えていくと、彼は二日目の朝と十七日目以外は電車の中で新聞を読んでいることが書かれている。いくらうかつな奴でも死んでいては売店で新聞を買うことができない。この事から死んだのは十七日という事になる。そして死因はプリント(9)に「自分が死んだことに気が

ついてない……」とあることから自殺や他殺ではなく自然死か事故死となる。しかし、彼はまだ四十八歳なので自然死の可能性はかなり低くなる。／ここで仮説をたててみる。一つはトンネルの中で電車とすれ違った時、すごい音のためショック死した。この説は理にかなってると思う。幽霊の事を除けば。／もう一度最初から幽霊の事を考慮に入れて考えてみる。彼はプリント(1)で分かるように「子供を育てる」「マイホームを手に入れる」「昇進する」などの生きる目標がない。そしてプリント(8)で兄貴にアドバイスしてほしいと思っっている。そういう事から、幽霊達に言われたプリント(9)の「自分が死んだ……あきれよ」とは「肉体でなく精神の死」つまり「目標がないのはうかつだぞ、目標を持って」という兄貴のアドバイスであって彼が本当に死んだのではないと思った。

この二篇は、《主人公は、いつ死んだのか》ではなく、《はたして主人公は死んだのか否か》ということ、あるいはむしろ、岸和田啓二の《死》そのものを捉え返そうとしたものである。そして、その徴証となったのは、

兄貴にひとつ、はっぱをかけてもらわなきゃ。もう三十年近く、そのはげましなしで一人でやってきたんだから。／そのせいで、疲れてしまっている。ひどく疲れている。兄貴にさりげなく適切なアドバイスを受ければ、疲れもけし飛んでしまうだろう。

(第五章)

という箇所であった。こうしてみると、生徒たちが感じたすわりの悪さは、作品世界そのものが別の《読み》を求めていること、あるいは、別の《読み》の可能性を孕^{はら}んでいることに由来していたと言えそうである。

残念ながら、第七時限が二学期の最終授業となってしまう。いつもならば彼らの感想文をもとに読解のまとめをおこなうのだが、三学期に入っても時間数の都合で実現できそうにない。結局、お茶を濁すようなかたちながら、一月十一日の講堂礼拝の講話で、私は『トンネル』の梗概と先の感想(6)・(7)を紹介し、次のようにまとめている。

こうやってストーリー展開を追っていくと、《夢や目標を失って、生きること疲れ果ててしまった男が、

死んで兄や姉のもとに行くことで安らぎを得る」という主題みたいなもんが、何となく浮かび上がってきます。君らが提出してくれた感想文も、だいたいそういうふう^①に捉えてんのが多かった。でもね、中にはこういう《読み》もあるんです。僕は、素直に「ええなあ」と思いました。その中から二つほど、ここで紹介しておくことにします。／（中略）／トンネルっていうのは、A地点とB地点をつなぐ空間です。だから、この小説を読む場合、トンネルは《この世》と《あの世》をつないでると考えてもいいんですが、いま取り上げた二つの感想文では、主人公の《疲れ果てた現在》と《それを乗り越えた未来》とをつなぐものとして捉えようとしているわけです。この感想文の《読み》にしたがって言うと、そのトンネルをくぐりぬけるかどうかについては、本人の意志によって選び取っていくことになるんですね。これって前向きな姿勢を持った《読み》だよ。生きることは苦しくて、それからの解放が死である」っていう、ある種パターン化した死に対する捉え方があったりしますが、それでも、しんどい現実（生）の中で次の生（の現実）を選び取っていくのは誰なのか——自分自身なんだ、ってことだよ。／話はいきなりスライドしますが、君たちがやがて迎える高校三年生っていう時期も、いま立ってるA地点から、どんなB地点に行くかっていうトンネルみたいなもんかも知れへん、と僕は思うわけです。もちろん、トンネルの中にも暖かい明かりを灯しときたいし、真っ暗で冷たいトンネルであってほしくないとは思いますが……。だって、高三っていうのは、ただの途中経過じゃないからね。そして、トンネルの向こうにあるB地点に、明るい光を見るために、まあ、君らは、というか、僕たちは、出口をめざして歩かなあかんのちゃうかと、いま僕は考えています。^②

国語教室における作品の《読み》は、生徒たちと共に作り上げていくものだと思つづくと思う。今回はその過程をきちんと踏んでこれなかった。いや、というよりもむしろ、今回は教師主導でやり過ぎそうと目論んで、却って生徒たちに「してやられた！」というのが正直なところである。

※ 生徒の感想文の引用に際しては、明らかな誤字・脱字、助詞の誤りを訂正した以外は、すべて原文のままとした。また、『トンネル』の引用に際しては、角川ホラー文庫『見知らぬ私』収載本文を用いた。

注

- ① 自主教材選定の基準については、拙稿「『山田詠美』を国語教室へ」（『日文協・国語教育』第27号、一九九五年十一月）に注記した。
 - ② 彼らは既に高一の段階で、例えば、鎌田敏夫『会いたい』の《読み》を紡ぎ出す作業に参与し、『会いたい』と同様の方法を用いて（現代の流行歌をモチーフに）小説を実作するという作業を体験してきている。この一連の取り組みについては、拙稿「鎌田敏夫『会いたい』の授業」（『同志社国文学』第43号、一九九六年一月）、同「現代の歌物語を書く」（『研究紀要』第32号、一九九五年十二月）を参照されたい。また、その成果をもとに、初対面である愛知県の高校生たちを対象に公開授業をおこなったことがある。詳細は、拙稿「公開授業報告 鎌田敏夫『会いたい』を読む」（『解釈』第42巻第5号、一九九六年五月）にまとめている。
 - ③ このテーマのもと、彼らと共に取り組んだのは次のような教材であった。
 - 一九九四年度・国語Ⅰ「現代文」……① マラソン・ランナーは孤独か（丸山健二）、② 蟬（山田詠美）※、③ 羅生門（芥川龍之介）※、④ 身体像の近代化（野村雅一）、⑤ 会いたい（鎌田敏夫）※、⑥ 私にとって都市も自然だ（日野啓三）、⑦ 風葬の教室（山田詠美）※、⑧ 目に見える制度と見えない制度（中村雄二郎）、⑨ 城の崎にて（志賀直哉）※。
 - 一九九五年度・国語Ⅱ「現代文」……① 三隅の桜（水上勉）、② 手の変幻（清岡卓行）、③ 愛の消印（俵万智）、④ 山月記（中島敦）、⑤ 広告表現とは何か（芹沢俊介）、⑥ ぼくは勉強ができない（山田詠美）※、⑦ 利休の死（井上靖）、⑧ 道具と文化（河合雅雄）、⑨ トンネル（清水義範）※、⑩ 座・間・家（中埜肇）、⑪ 近現代短歌（窪田空穂ほか）。
- 以上のうち、①・②・③・④・⑤・⑥・⑦・⑧・⑨・⑩が自主教材で、それ以外は使用教科書（一九九四年度は第一学習社『新訂国語Ⅰ』現代文・表現編、一九九五年度は第一学習社『高等学校現代文Ⅰ』）に収載されたものである。また、※印を付した教材では、① 初発・最終感想文各一篇、② 続編の創作一篇、③ 感想文・歌物語の創作各一篇、④ 登場人物評・感想文各一篇、⑤ 感想文一篇、⑥ 感想文一篇、⑦ 感想文一篇、⑧ 感想文一篇、⑨ 感想文一篇、⑩ 感想文一篇、といった内容で、生徒たちに書く作業を課している。
- ④ 作品全篇の所謂「通読」の否定は、児童言語研究会『新・一読総合法入門』（一光社、一九七六年）などにおいて、つとに提唱されている。
 - ⑤ 講話『『トンネル』をくぐりぬけろ！』（『樹心集』第30号、一九九六年三月）。

付記（読者のみなさんへ）

このたびは、私の授業実践をダウンロードしてお読みいただき、ありがとうございます。

私のホームページ《たまぶりぶり通信》では、「授業実践記録」(<http://www.nextftp.com/tmbb/lessons/>)に次のような授業実践を公開しています。WEB版の閲覧とPDF版のダウンロード、いずれの形でもお読みいただけるようになっていきますので、是非、ご利用ください。今後も少しずつ追加していく予定です。

《たまぶりぶり通信》WEB版・PDF版

- 山田詠美『蟬』の授業
- 現代の歌物語を書く
- 鎌田敏夫『会いたい』を読む
- 清水義範『トンネル』の授業
- 鷺沢萌『ほおずきの花束』の授業

また、「生徒たちの《現実》と切り結ぶために」と題した全六篇のシリーズを《でじたる書房》にて販売しています。この一連の論考は、高校生たちの現実感覚や体験と響き合うような現代作家の作品（五篇）を自主教材として取り上げた授業実践あるいは授業指針について述べたものです。タイトルと扱った作品は次の通り。あわせてお読みいただければ幸いです。

《でじたる書房》PDF版

- 心の《皮むき》のために——山田詠美『賢者の皮むき』の授業——
- 恋人という名の他者——岩川隆『有楽町心中』の授業——
- 選択肢としての《生》——重松清『舞姫通信』の授業——
- 《希望》の在処——村上龍『希望の国のエクソダス』の授業——
- 新たな《現実》に向かって——鷺沢萌『卒業』の授業——